

# 霞

- 2009年度秋季展示室だより -

土浦市立博物館

平成21年10月1日発行(通巻第9号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(9)

### 絵葉書「土浦名所 土浦町全景(其の二)」



旧土浦警察署の火の見櫓(現中央一丁目、日本生命土浦ビル付近)から桜橋方面を撮影した一葉です。左手前にみえる屋根は豊島百貨店(土浦初のデパート)、中央に埋め立て前の川口川が流れ、桜橋が架かっています。左手遠方にはうっすらと、関東一の名山といわれた筑波山。大正13(1924)年頃の土浦町の風景です。

【情報ライブラリー検索キーワード「筑波山」「土浦名所」】

## 目次

古写真・絵葉書にみる土浦(9)・・・	1
博物館からのお知らせ・・・	1
【2009年度秋季の展示資料解説】	
東城寺経塚出土の経筒(複製品)(古代)・・・	2
東寺百合文書(複製品)(中世)・・・	3
土屋彦直一行書(近世)・・・	4
高瀬船と水運(近世・近代)・・・	5
筑波鉄道とケーブルカー(近代)・・・	6
市史編さんだより・・・	7
「霞」短信 博物館実習をおえて・・・	8
コラム(9)・・・	8
情報ライブラリー更新状況・・・	8

## 博物館からのお知らせ

### テーマ展「烈公打ちの刀 - 水戸刀工と金工の名品 - 」 開催中～10/11(日)

土浦藩土屋家に伝わった水戸徳川家9代藩主斉昭(烈公)が作刀した刀剣を中心に、水戸刀工と金工の名品をご紹介します。当館所蔵の重要文化財もあわせて公開しています。

展示解説会 10月3日(土)午後1時から 要入館料

### 企画展「古代の筑波山信仰 - 内海をめぐる祭祀の源流 - 」10/31(土)～12/13(日)

常陸の名峰筑波山の信仰と祭祀のあり方やその源流について、常総の地域形成を視点に紹介します。

記念講演会 11月7日(土)午前10時30分～12時

講師：茂木雅博(土浦市立博物館館長) 演題：「古代日本における山と信仰」 定員70名(先着順)

企画展講座 11月22日(日)午前10時30分～12時

講師：当館学芸員 演題：「筑波山信仰の源流をさぐる」 定員：70名(先着順)

現地見学会 ～筑波山神社と周辺の遺跡をめぐる～ 11月29日(日)午前9時30分～午後4時

行先：平沢官衙・六所神社跡・筑波山神社・女体山頂・八幡塚古墳ほか 定員：40名(先着順、要申込)

参加費：1,100円(ケーブルカー代ほか)

展示案内会 11月8日(日)・22日(日)午後2時～ 要入館料

館長講座(茂木雅博館長) 10/11・11/15・12/20(いずれも日曜日)

はたおり体験講座 10月17日～12月5日までの毎週土曜日 はたおり体験は予約制、詳細は要問合せ

博物館マスコット  
亀城めくくん



お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

# 東城寺経塚出土の経筒(複製品)

## - 平致幹、延暦寺の僧を招いて經典を納める

「霞」第8号で紹介した市指定史跡「東城寺経塚群」では、経塚が全部で12基が確認されています。それぞれの塚には、経巻を入れた経筒が納められていたと考えられますが、多くは散逸してしまい詳細は分かりません。経筒は、経巻を入れて保護するための容器ですが、その外面には収納經典名や願意、营造次第、营造者、埋納年月日などの銘文が記されていることが多く見られます。現在、東京国立博物館に保管されている東城寺経塚出土の経筒2個には、次のような銘文が記されています。

(経筒1の銘文)

経筒1

保安三年大歳壬寅八月十八日甲辰  
如法教書写供養願主  
聖人僧明覚大檀越平朝臣致幹  
為並法界衆生平等利益所  
奉遂果如右 敬白



(経筒2の銘文)

経筒2

天治元年歳次甲辰十一月十二日乙酉  
奉安置銅壺一口  
行者延暦寺沙門経暹  
大檀越郡陰子平致幹  
銀作三国将時



保安3(1122)年銘の経筒からは、僧明覚(注1)が願主となって如法教(法華經の別称)を書き写して供養を行い、施主が平致幹であることが分かります。また、天治元(1124)年銘の経筒も平致幹が施主となって、延暦寺(滋賀県、天台宗の総本山)の僧経暹(注2)が経筒を安置したことが分かります。

致幹は11世紀から12世紀にかけて常陸国南部の大半を支配した常陸平氏(平国香の祖)の流れをくむ武士団の棟梁です。致幹は「多気権守」と呼ばれ、奥州藤原氏と姻族関係を結ぶなどして、その勢力は絶大なものがありました。当時、延暦寺の著名な僧であった明覚や経暹を遠い東国の地に招いて経塚を築き祭祀を執り行なうには、相当な財力が必要であったと想像されます。

東城寺は常陸国府(石岡市)へと流れる天の川の水源地ともなる山腹に位置し、遠く土浦入り(霞ヶ浦につながる桜川河口)や桜川中流域の広大な範囲から望むことができます。致幹が経塚を築いた目的は、末法思想を背景とした作善事業というよりは、他に並ぶもののない政治力と経済力を内外に誇示する事だったのかもしれませんが。

(注1) 天喜4(1056)年生れ、没年不詳。平安時代後期の天台宗の僧。比叡山で学び、後に加賀国温泉寺に住した。悉曇学の祖と仰がれ、法華經の音義を偏したとされている。

(注2) 生没年不詳。安養房と号し、比叡山の無動寺に住した。天台秘密法の明匠といわれ、康和2(1100)年法眼となって辻法眼と称される。(中澤達也)

11/28(土)午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
東城寺経塚出土品(複製品)(古代・中世コーナーに展示)  
妙法蓮華經(複製)、銅製花瓶(複製)など



# 東寺百合文書(複製品)

## - 地名「土浦」の登場

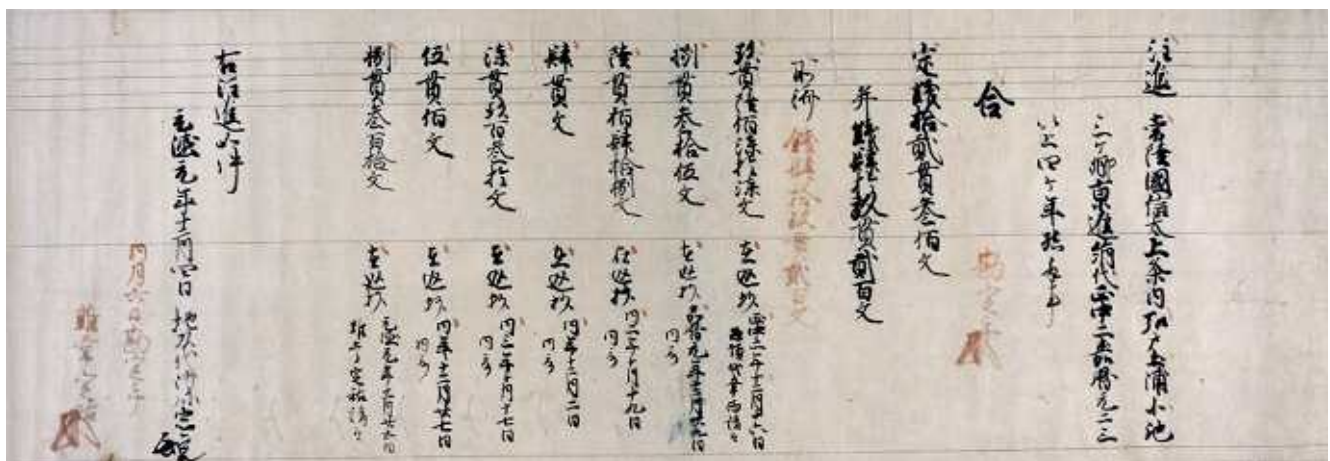
「現在わかっている史料のなかで『土浦』の地名が初めて登場するのが『東寺百合文書』です。これはその複製です。」展示室でこのようにご紹介すると、身を乗り出してご覧になる方もいらっしゃいます。ふるさとの地名の由来に関心を持つ方は少なくありません。残念ながら「土浦」の由来もはっきりしたことはわかっていないのですが、今からちょうど680年前の元徳元(1329)年に書かれた「東寺百合文書」の一行目「常陸国信太上奈内弘戸土浦小池三ヶ郷」を読むと、普段何気なく使っている地名の歴史の深さを思わずにはられません。

さて、「土浦」の名は一箇所だけで他は漢字ばかりです。この文書は結解状といい、領主に代わって荘園を管理する地頭が荘官(領主の代理人)に、年貢の納入状況を報告したものです。合計を意味する「合」が大書され、次の行「定銭拾貳貫参佰文」以降、漢数字や「貫」「文」など銭の単位が繰り返し出てくるのはこのためです。二行目の「京進絹代」とは、絹の代わりに銭を収めるようになったことを示しています。

鎌倉時代の末期、土浦周辺の年貢はどこに収められたのでしょうか。この地域は誰の領地だったのでしょうか。

霞ヶ浦に面する現在の土浦市域から稲敷郡にかけては信太荘と呼ばれる荘園(貴族や寺社の私有地)でした。信太荘は常陸国では南野牧に次ぐ広大な荘園で、その成立は12世紀頃と言われています。最初の領主は藤原宗子(池禪尼)でしたが、のちに鳥羽院や美福門院、八条院ら皇室ゆかりの人々に引き継がれていきました。文保2(1318)年、後宇多法皇によって東寺(教王護国寺)に寄進されました。京都駅の南側、「弘法さん」として親しまれる東寺の支配下に、土浦を含む信太荘はおかれることになったのです。

奈良時代から江戸時代初期にいたる東寺領荘園に関わる大量の文書は、加賀藩主前田綱紀(1643~1724)が整理・保存用に寄進した百個の箱に収められてきたことから「百合文書」の名がつけました。地名「土浦」が初出する文献で、東寺と信太荘との関わりを示す史料であることはもちろんですが、中世の貴重な経済史料として現在国宝に指定されています。(塩谷修)



東寺百合文書(複製品)

10/3(土)午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
 常陸国富有人注文(複製)(古代・中世コーナーに展示)  
 小岩田東出土 同安窯系青磁櫛搔文碗(古代・中世コーナーに展示)  
 小岩田西出土 龍泉窯系青磁蓮弁文碗(古代・中世コーナーに展示)



よしなお

# 土屋彦直一行書

## - 水戸徳川家から迎えられた藩主 -

一行書「両水夾明鏡」は「両水、明鏡を夾む」と読みます。まず、文字を鑑賞してみましょう。「両」はたっぷり墨汁を含ませた筆で書き始め、楷書に近い形です。「水」「夾」と書き進むに従い、草書に近くなっていく。最初の「両」と最後の「鏡」を見比べると、一字目はゆっくり書いたように見え、五字目には躍動感があります。筆は徐々に速度を増していったようです。

「両水、明鏡を夾む」とは「ふたつの川が、まるで澄んだ鏡のような美しい地をはさんで流れ込んでいる」という意味で、唐代の詩人李白の五言律詩「秋、宣城の謝朓の北楼に登る」の一節です。この漢詩で李白は、尊敬していた詩人謝朓が昔滞在していた宣城という川沿いの町の風光をほめ称えました。

改めてこの書を見直してみると、漢詩に詠まれている川のイメージと緩急を書き分けた書がよく調和した作品です。

署名の「彦直」は、第9代土浦藩主土屋相模守彦直（1798～1846）です。彦直は幼名を治三郎といい、水戸藩主徳川治保の三男として誕生しました。土浦藩では土屋寛直が文化7（1810）年10月、16歳の若さで亡くなり、継嗣がありませんでした。大名に跡取りとなる男子がいないのは家名断絶の危機です。土浦藩の家老らは水戸徳川家に養子を懇願、交渉の末、治三郎が土屋家に迎えられることになったのは文化8（1811）年4月、時に治三郎は14歳でした。のちに彦直と改名、寛直の妹充子を妻に迎え、土浦藩主を継ぎました。文政3（1820）年には、多仁丸（のちの10代藩主寅直）が誕生しています。

彦直は奏者番、寺社奉行など幕閣の要職につきました。天保5年（1834）には、著名な儒者であった藤森弘庵を土浦藩に招き、また、紀州の外科医華岡青洲に学んだ医師辻元順を高く評価しました。天保9年、家督を寅直に譲りますが、彦直が築いた藩政の基礎は寅直の時代に諸改革として展開されました。彦直は羽幕（茶道で炉や風炉の周囲を清めるもの）を自作しており、芸能や風流を解する人物でもあったようです。

再び書に戻りましょう。彦直はなぜこの詩の一節を選んだのでしょうか。城下町土浦も桜川（桜橋のところを流れていた旧桜川）と太郎兵衛川（現桜川）にはさまれた「明鏡」の地です。彦直は縁あって藩主となった土浦の地を愛し、李白の詩を借りて称えているのではないかと、証明する史料はありませんが、この書を見ているとそのように思われてなりません。

（木塚久仁子）

土屋彦直一行書（本紙）



10/24（土）午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
土屋家家譜（近世コーナーに展示）  
土屋彦直書「鶴亀」（近世コーナーに展示）  
土屋寅直印章（近世コーナーに展示）



たか せ ぶ ね

# 高瀬船と水運

## - 江戸と土浦を結んだ人々 -

博物館の展示ホールに高瀬船模型が常設されています。精巧な1/5サイズの模型で、故・鈴木国蔵さんの手によるものです。鈴木さんは明治37(1904)年、利根川沿いの小堀(現取手市)の船大工の家に生まれ、小学校を終えると父のもとで修行をしました。しかし、当時の高瀬船水運はすでに衰退期で、高瀬船の新造にかかわったのは一度だけでした。仕事が減った一家は、昭和2(1927)年に土浦へ移り住み、ボートなどの製作にたずさわりました。そして、晩年の鈴木さんが取り組んだのが、当館の精巧な模型でした。

江戸時代、土浦河岸を出発した高瀬船は霞ヶ浦をわたり、利根川をのぼって江戸川をくだり、大都市江戸に米や醤油を運びました。では、一体どのくらいの時間をかけ、どのように物資を輸送していたのでしょうか。残念ながらその航行を具体的に知る史料は見あたりませんが、串挽河岸(銚田市)から北浦をわたり、利根川・江戸川を通して江戸に物資を輸送した水戸藩召し抱えの船頭の日記を参考にできそうです。

日記を分析した渡辺英夫さん(秋田大学)によると、そこには嘉永6(1853)年の4回にわたる串挽江戸間の航行記録が書かれているそうです。このうち、利根川の登り(牛堀・潮来 境)では4~7日、下りで3~4日ほど、江戸川の下り(関宿 江戸)は1日、登りは3~8日程で航行をしています。しかし、実際には天候回復を待つための停泊、関宿の船番所での順番待ちをするなど、それ以上の時間がかかりました。たとえば、串挽を6月25日に出発した4回目の往路では、翌26日に利根川へ入りましたが、湯水と台風による停泊が続き、江戸に到着したのは7月19日のことでした。

日記からは高瀬船をどのように動かしたのかも判明します。風を受けると早く航行できますが、風向きや強さによっては帆柱をおろして進まなければなりません。その場合は、「竿働き」といって竿をさして船をすすめ、ときには「綱働き」といって、岸から綱で船を引っ張りました。また、浅瀬では、荷物を運ぶ小船に積み替えて船を軽くし、喫水(船体の水中に没している部分の深さ)を小さくしました。天候や風向き、川底や水位、潮の干満までも考慮しながら、船を巧みに扱う船頭の姿が浮かびあがってきます。

土浦の発展に重要な役割を果たした水運ですが、その主役は高瀬船の船頭や利根川水系の船大工たちでした。資料を探求しながら、その実態に少しでも迫っていければと思います。(萩谷良太)

【参考文献】 渡辺貢二『利根川高瀬船』(1990年)、渡辺英夫『利根川水運史の研究』(2002年)



高瀬船模型(1/5)



土浦 江戸間の水運

12/5(土)午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
河岸改関係文書(近世のコーナーに展示)  
御用日記(東崎町の高瀬船数)(近世コーナーに展示)  
船大工道具(近代のコーナーに展示)



# 筑波鉄道とケーブルカー

## - 近代の筑波山案内

西の富士、東の筑波と称された筑波山は、古くから和歌に詠まれ、また信仰の対象の山でもありました。平安時代には仏教が入り、寺（後に中禅寺）が造られ神仏習合となりますが、明治の神仏分離令、さらに廃仏毀釈により寺は廃され、今ある姿の筑波山神社になっています。

近代の筑波山を訪ねてみましょう。「筑波鉄道株式会社 線路案内」には、筑波鉄道（大正7年土浦 岩瀬間が開通）周辺の名勝や史跡が紹介されています。解説には「（前略）東京人士が朝に上野駅を発車すれば優に此の高山に遊びて即日帰京することを得て 都人士年来渴望せられし登山遊に供せんが為の鉄道なり（後略）」とあります。鉄道は、東京方面からの日帰りの登山客も見込んだもので、常磐線土浦駅から乗り換え、接続しました。土浦は筑波山へのいわば玄関口だったわけです。大正8（1919）年の「汽車時刻表」によると、常磐線上野6時始発 土浦着8時20分、筑波鉄道土浦発8時45分 筑波着9時38分の、3時間半強の往路です。そこから登山は4～5時間かかります。帰りは筑波発15時12分 土浦着16時4分、常磐線土浦発16時49分 上野着19時と、なかなかハードなスケジュールのようです。

大正14（1925）年にはケーブルカーが開通しました。「筑波山ケーブルカー案内」によると、筑波駅から筑波町まで乗合自動車（バス）で十数分、神橋・隨身門・拝殿などを見学します。そこからケーブルカーで筑波山頂停車場まで8分（徒歩では1時間半位！）。停車場（男体山と女体山の分岐点）から、まずは男体山の御本社・筑波山測候所・立身石へ。さらに女体山へ向かい、御本社・天の浮橋などを見学。天の岩戸・高天ヶ原・弁慶七戻りなどを巡り、徒歩で下山（1時間半位。ケーブルカーでの下山も可能）します。盛りだくさんのコースを堪能できそうです。

筑波鉄道の敷設やケーブルカーの開通により、筑波山登山や参詣は気軽なものとなり、神社前の旅館街の観光客は増加しました。土浦でも水郷汽船・海軍航空隊・桜川のお花見などと併せた見物客の誘致に熱心な動きが見られ、昭和初期は大いに賑わったのです。

昭和30年代以降の道路整備、昭和40（1965）年のロープウェー完成の一方で、同63年に筑波鉄道は廃線（現在は自転車専用りんりんロード）となりますが、つくばエクスプレスの開通などにより、筑波山は新たな形で観光客を集めています。信仰の山であること、筑波鉄道があった頃に思いをはせながら、筑波山を訪れてみてはいかがでしょうか。（宮本礼子）



「筑波鉄道株式会社 線路案内」（部分）個人所蔵



12/12（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
筑波鉄道速成協議員囑託状（近代コーナーに展示）  
筑波登山手引山案内（近代コーナーに展示）  
筑波山絵葉書（近代コーナーに展示）



# 市史編さんだより

## ～ 『家事志』 にみる城下町土浦の和歌の世界 ～

色川<sup>みなが</sup>三<sup>かじし</sup>中の日記『家事志』の冒頭で三中は、亡父の一周忌に際して  
めぐりこし今日はな暮そなき君に又も別れの心地こそすれ

と哀惜の歌を詠んでいます。あなたの亡くなった1年めの今日はどうぞこのまま暮れないで欲しい、そ  
うでないとお別れしたあの悲しみをもう一度繰り返さなければなりません、というような想いの  
歌です。この2ヵ月ほど後の7月の末には、父方の従弟に当たる谷田部の今川宅三郎家の新築祝いに

むかしいまかはらてこゝにすみ吉の松の千とせをいくかえりへん

という和歌を贈っています。昔も今も変わらずにずっとここに住み続けている今川家は住吉の千年松の  
長さを何回も繰り返すほど栄えてください、と今川の文字を掛詞<sup>かけことば</sup>で詠み込んでお祝いの言葉にしていま  
す。

第7号の「霞」で紹介された沼尻墨僊<sup>ぬまじりぼくせん</sup>の「西杖日記」<sup>さいじょうにっき</sup>で、伊勢参宮に同行した河田庄三郎<sup>かわだしょうざぶろう</sup>は三中の  
親しい歌友でした。水戸藩士の吉田<sup>のりよ</sup>令世という歌人などとも交流があり、歌会への誘いの記事もみえま  
す。土浦町奉行を勤めた藤井縫右衛門<sup>ふじうえもん</sup>（<sup>なかば</sup> 央・<sup>まさき</sup> 方積記）や後に佐久良東雄<sup>さくらあずまお</sup>と名乗った善心寺<sup>ぜんしんじ</sup>の住僧良哉<sup>りょうさい</sup>、  
山口弥左衛門<sup>やまぐちえもん</sup>、三中の弟の美年<sup>みとし</sup>など身分や立場を越えて同好の士がつどい、歌を詠みあったり国学の話  
題に興じたり、という交流が家事志にはたくさん記録されています。天保4（1833）年4月には三中が藤  
井万積記の訪問を感謝して

春辺さく藤井の君のとひませし草の庵は露そ玉しく

春に咲く藤の花のようなあなたが尋ねてくださると、粗末な我が家でも露さえ玉のようにかがやきます  
（光栄です）、と詠みかけると

あたいなき玉はしきしもさす竹の君か言玉ひかり有りけり

と返しました。あなたの（和歌の）お言葉のほうが輝いていますよ、とお互いに贅辞をおくりあって、  
夕食を共にし、お酒も飲んで楽しんだようです。

毎年正月の日記の書き始めには、三中や美年は年頭の和歌を詠んでいます。文政11（1828）年の正  
月には色川家の奉公人の佐助が

初春にたから持ち込む福鼠首も手足も尾もしろき哉

此帳は春のはしめの福寿草開て見れば山吹之色（大福帳の表紙）

と狂歌を詠んだのを三中は面白く思ったのでしょう、2日の条に書き付けています。

また天保5（1834）年9月には、奉公人で府中（現石岡市）出身の仁兵衛が病を得て実家へ帰ることに  
なった折りに

おもひきやあつき<sup>めくみ</sup>恵をうけながらかへらぬ旅におもむかんとは

と駕籠<sup>かこ</sup>に乗りながら三中に歌を差し出しました。こんなに篤くご恩をうけながら（ご恩返しもできない  
まま）死んでしまうのは残念なことです、とお別れを告げるのです。もっとも、仁兵衛は元気に回復し  
てまた奉公を続けることができました。和歌に精通していた三中には、才気のある奉公人たちは、好ま  
しかったのではないのでしょうか。

この時代すべての人たちが和歌を楽しんでいたというわけではありませんが、現代よりはずっと身近  
に感じていたと思われます。今『家事志』の第四巻の校正作業の最中です。『家事志』のなかの和歌に  
も目をとめて読んでいただくと面白いと思います。 村松常子（市史編さん係非常勤職員）

# 霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。今号は博物館実習生の感想を掲載します。当館では考古資料館とともに、学芸員資格取得のための館務実習を受け入れています。本年度は12名の実習生が、施設見学からはじまり、歴史・考古・民俗資料の整理や体験講座の手伝いを行いました。

## 博物館実習を終えて

土浦市立博物館は小学校の頃より利用してきたので、博物館について色々知っているつもりでした。しかし、実習で話を聞いたり、勉強したりしていくうちに、まったく知らなかったことや、理解不足な点があることに気がつきました。今回、貴重な資料を用いて実習ができたことはとても良い経験となりました。どの資料も後世へと伝えていかなければならないものなので、取り扱いにはとても緊張しました。資料は土浦に関するものなので、自分が住んでいる地域の歴史にふれ、学ぶことができ、充実感でいっぱいでした。

学芸員の仕事については、自身の専門性を活かし研究をしているだけというイメージをもっていました。が、多種多様な仕事をしていると認識が変わりました。また、地域の方々の協力なしでは成り立たないと感じました。  
(菊田裕子、国土館大学4年生)

6日間の実習を通して、大学の授業ではなかなか分からない学芸員の仕事や現場を知ることができました。取り扱う資料は古文書・甲冑・掛軸など、どれも二度と手に入るものではなく、それらを状態を維持して保存するには徹底した対策が不可欠であると、施設見学や収蔵庫での整理を経て実感しました。現在は何をすることもパソコンを使う機会が多いのですが、今回の実習ではひとつひとつが手作業でした。時間がかかることですが、資料の性質や特徴を見極めるといふ点では、とても大切なことなのだと思います。

学芸員のメインの仕事は展示や館内での業務だと思っていましたが、校外学習や体験学習も多く行われていて、たとえ自分では資料に関して十分な知識があったとしても、それを利用者や参加者にわかりやすく伝えたり、興味をもつ工夫をしなければ博物館として成り立たないと分かり、どちらの能力にもかた寄ってはいけなさと感じました。  
(堀真己、川村学園女子大学4年生)

## コラム(9) 「展示解説会」へいらっしやいませんか

「新しい『霞』は出ましたか？」四季で展示替える展示品をご紹介しますことを目的にして始めた本紙「霞」ですが、刊行を待ち望んでくださる方もあるようで、こんな嬉しい声が聞こえます。

「霞」に加えてもうひとつ始めたことが毎月2回の「展示解説会」です。「霞」が書き言葉でのご案内なのに対して、この「展示解説会」は話し言葉でのご案内ということになります。「霞」の「展示資料解説」には展示品に対する研究成果を学芸員が盛りだくさんにつづっている観がありますが、「展示解説会」は参加者のご様子や興味の所在を確かめつつお話ししています。「展示資料解説」は推敲を重ねて書きますが、「展示解説会」は参加者に応じて話し方や内容を微妙に変えます。学芸員にとっては会話しながらの楽しい時間でもあり、鋭い質問にたじたじとなる冷や汗の時間でも、自分の説明の良否がその場で実感できる時間でもあります。「展示解説会」は当日午後2時からが原則ですが、時間外でも学芸員の方から「お聞きになりませんか？」とお声をかけることもあります。「霞」同様、皆さんに親しんでいただけるよう続けていきます。「展示解説会」へいらっしやいませんか？  
(木塚久仁子)

## 情報ライブラリー更新状況

【2009・10・1 現在の登録数】

古写真 426点(+5)

絵葉書 332点(+8)

( )内は2009年7月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真もご覧いただけます。

## 霞(かすみ) 2009年度

秋季展示室だより(通巻第9号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2009年度冬季展示は、2010年1月5日(火)~3月中旬となります。「霞」2009年度冬季展示室だより(通巻第10号)は1月5日(火)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。